

土のぬくもりが伝わる

札幌焼

大正時代に、中央区で日用雑器類を主とした焼きものの造りが行われていたことを知っていますか。今では幻の陶器となった、この「札幌焼」について紹介します。

旭山記念公園の入口近くにある「札幌焼窯跡」。

ここにあつた登り窯では、大正時代、札幌焼と呼ばれる陶器が生産されていきました。また、末期には本州方面から材料を取り寄せ、磁器の生産も行われていたようです。

札幌焼は、この付近の粘土や豊富な沢水、林内のマキ材料を利用して生産されていきました。大正四年に中井陶器工場が札幌陶器製造株式会社を引き継いだ後は生産量も増え、最盛期には、函館焼、小樽焼と並んで、道内陶器造りの拠点となっていました。

札幌焼という銘が入れたのもこの時期のことです。ここで作られた製品は実用品が主で、かめ、はち、すりばち、花びん、ちゃわん、とっくり、き

ゆうす、湯たんぽなどが知られています。しかし、本州産陶磁器の攻勢と、後ろ盾になっていた三国屋（酒類、食料品雑貨商）の倒産の影響もあつて、大正十四年（一九二五年）にその幕を閉じています。

（平成五年五月号・第一回）



とっくり（北海道開拓記念館所蔵）